俳句の鑑賞指導における研究ノート
－アクティブ・ラーニング導入のための事前準備について－

所　長　鈴木　晴久

【要旨】　俳句は凝縮された簡潔な表現であるため，読み手のイメージがそれぞれに拡がり，共通したイメージを持ちにくい教材である。また，使われている言葉自体も作られた時代によって異なったり，現代では異なる意味やイメージを持ったりするものもある。アクティブ・ラーニングを用いて，生徒の理解を深めるためには，一定の共通した理解やイメージを持たせ，それを更に深めることが必要である。

そこで，生徒の理解のレベルを把握し，そこからアクティブ・ラーニングを組み立てる準備段階として，初読の鑑賞文とそれに対する感想文の分析を通して，共通イメージを持たせ，アクティブ・ラーニングにつなげることを試みた。

【キーワード】　アクティブ・ラーニング　俳句の鑑賞指導　共通イメージ　事前準備　鑑賞文

１　はじめに

俳句は五・七・五のわずか十七音による世界で最も短い詩の形式であり，その形式の中で表現上の工夫が積み重ねられてきている。長谷川孝士は，国語教育で俳句を扱う意義について，「この圧縮された表現に即して，その情景と心情を想像的に把握する言語活動を通じて，文学を理解・鑑賞する能力の基礎を養う点にある。」（注１）とし，さらに教材として取り上げる作品について「児童・生徒の実態に即応することが第一義的に求められる。（中略）児童・生徒の興味関心。問題意識，言語能力の状態を考慮しながら教材化することが必要である。」と述べている。

また，指導上の留意点として，イメージを組み立てて広げるため，一つ一つの語句のもたらすイメージを確かめ，それらのイメージを相互に関連づけ，立体的に組み合わせてイメージを広げること。そのために，指導者のヒント・助言・問いかけなどの適切な「着眼」が有効であるとしている。

しかしながら，北川茂治が指摘しているように（注２），俳句は凝縮された簡潔な，省略の文学であるため，表面上の句意はなんとなく想像できても句の真意を味わうまでにはいたらない。それは句作の背景や作者の境遇が分からないからやむを得ないことであるとしている。例えば，種田山頭火の「分け入っても分け入っても青い山」という句は，山頭火の漂泊の人生を踏まえれば，漂泊の寂しさを詠んだものであることが分かるが，それを知らずに「青い山」を肯定的に捉えると「山はどこまでも青く続いている」といったイメージに捉えかねない。

また，詠まれている対象や言葉が年代を経るに従ってその扱われ方やそれに伴うイメージが変化している場合もある。

高等学校においても，俳句は知識や分析の対象としてよりも，生徒の内面の感覚や思考を柔軟にし，それぞれの感受性を開くためのものとして扱いたいとされている。

しかしながら，教科書に取り上げられている作品は，文学史の上で，評価の定まった作品であり，作られてから一定の年月を経ている。従って詠まれている情景や対象が生徒の実態に合わない場合があり，そこに示される心情も理解しにくいものもある。そうした教材と生徒のイメージの差を埋めるのが，上記の「ヒント・助言・問いかけなど」になると思われるが，授業者の講義による解説では，単なる説明になってしまい却ってその句の持つイメージを損なってしまう恐れがある。

２　アクティブ・ラーニングの導入について

アクティブ・ラーニングは，生徒が主体的に問題を発見し答えを見いだしていく方法で，授業者による平面的な講義にならないようにするための有効な手段であるが，俳句の授業の場合，上記に示したように，俳句が凝縮された簡潔な，省略の文学であるため，句を読んだだけではそれぞれが持つイメージが拡がりすぎてしまい，読解を深化させる事ができず，雑談に終わってしまう可能性が高い。従って導入前の予備段階において，あるレベ

ルまでは共通の認識を与え，そこから深い学びへと導いて行くことが必要であると思われる。

本研究ノートは，俳句の授業におけるアクティブ・ラーニングの導入について，その予備段階における必要な項目を検討するため，一句を取り上げ，初読における生徒たちのイメージを収集・分析し，そこから，アクティブ・ラーニング導入に至るまでに必要なポイントについて考察するための試みである。

３　方法

教材：教科書に掲載されている俳句十五句

方法：最初の授業時に生徒を指名，音読させる。
次に原稿用紙を配布し，印象に残った句を一句選ばせ，鑑賞文を書かせる。
鑑賞文を集め，別の生徒に再配布し，その鑑賞文に対する感想等を書かせる。（この際，ペンネーム方式を用いて，その鑑賞文の作者が誰か分からないように工夫した。）
回収して，次の時間に授業者による評価を加え，返却し，鑑賞文及びその感想文を使いながら，授業者の解説を加える。

４　教材

今回使用したのは，近現代の俳句15句である。その中から，山口誓子（注３）の「蛍獲て少年の指みどりなり」（句集『青女』中部日本新聞社　1950所収）を取り上げる。

５　生徒の捉えたイメージ

この句を選んだ生徒は40人中9人であった。他の句に比べてイメージが捉えやすかったという理由がほとんどであった。

以下にその鑑賞文とそれを読んだ他の生徒の感想文を挙げる（注４）。（傍線部は筆者加筆）

文例1

蛍をつかまえて，その光で少年の指がみどり色になっているのが，きれいな感じがする。①「つかまえて」が「獲る」になっているから，なんだか，いくらとろうとしてもつかまえられなくて，苦労してつかまえたという感じがする。

感想文

まず，初めに，②蛍の光とは緑色だったんだなあと思いました。

自分はいろいろ考えてしまって，③蛍をつぶしてしまって緑色だとか，考えていました。

④「獲て」という言葉で，そこまで考えたのはすごいなと思いました。

文例2

⑤なぜか蛍を見つけて見ているうちにどうしても，その蛍がほしくなってきて，初めは，そっと優しく取ろうと思っていたがなかなかつかまえられないので，もう絶対に取ってやろうと思って，やけっぱち取りにいって，⑥やっとつかまえたら手で思いっきり握りしめたために手の中でつぶれてしまい，蛍の緑の血が手や指についた。このような俳句。

感想文

蛍をつぶしてしまったという解釈は僕にはできなかった。⑦僕は苦労してつかまえた蛍が暗闇の中で光っている感動を詠んだものだと思ったが，こういう解釈もユニークでいいんじゃないかと思う。

文例3

蛍の光は遠くから見れば，ぼんやりと黄色の光がかすんで見えるが。⑧実際に手に取って指の先に蛍をのせて間近に見れば，黄色ではなく，緑色に見える。そんな蛍を見て，少年はじっと静かに蛍が逃げないように，やさしく見つめている姿があらわれる。

蛍は間近で見たことがなく，遠くからの光は見たことがある。だから多分，私は，間近で蛍を見たいという願望からこの俳句を選んだのだと思う。

感想文

この一行の句から，ここまで読み取れるのはすごいと感動しました。⑨光の色の違いに目をつけている所が私と違うので，新鮮な感じがします。私はこの句は，「一人の少年が，なかなか蛍をつかまえられなくて，やっとのことでつかまえた蛍が手の中で緑色に輝いている」と解釈しました。⑩やっとつかまえた，というううれしさで，指まで緑に輝くほどの光を感じることのできた少年の素直な心を詠んでいると思いました。

文例4

選んだわけは，一番わかりやすかったから。⑪小さい男の子が蛍をつかまえて，⑫蛍のみどりっぽい光が，少年の指をみどりにそめて

いるのがすごくほのぼのしたふんいきでよい。

⑬その男の子と作者がどういう関係なのかはわからないけど，少し離れた所で三者はその光景を見ていて思った歌なのかな。

感想文

私は，⑭この歌はとても，神秘的な感じがする。少年の手をみどりに染めている蛍の光はそこだけがまた別の空間のように思った。少年はその時どんな気持ちだったのだろうと思う。けれど作者と同じようにその光に感動しているような気がする。

文例5

八月ごろの暑い夏の夜，少年が歩いていると，下の河原に，たくさんの蛍がかすかに光りながら飛んでいた。少年はつかまえようと河原におりて行った。そして河原で少年が一ぴきの蛍を両手でつかまえると，⑮手の中で，蛍がかすかに光っているので少年の指がその光によってみどりっぽく光っていた。

感想文

よく，こんなに細かくイメージがわいてくるなあ，と感心しました。私も，同じ俳句を選んで，この俳句に持ったイメージとほとんど同じです。でも，実を言うと，この俳句を読んで直感的に抱いたイメージは，少年が蛍を追っかけていて，やっとつかまえたんだけど，⑯勢い余って蛍を指でつぶしてしまい，蛍から緑のしるが出て，（あー，汚い）指が緑になったのでは…と感じました。

文例6

⑰私は小さい頃，家族で蛍を取りに行きました。光っているのはわかるのですが，つかまえる事ができませんでした。それから，映画でみたのですが，洞くつの中で蛍を一ぴきいれたびんをもって，蛍の光に頼って探検する所がありました。それをみた時，ちょっと感動してしまいました。だから，この俳句を読んで，⑱少年の蛍をつかまえた喜びと蛍がだす光に驚いている心が伝わってくるような気がしました。

感想文

私も，この俳句が好きです。私は，この俳句は，⑲とても静かな感じがします。蛍のみどりの光は，小さいけれど，少年をつつんでいるような神秘的な感じがします。映画って何ていうやつ？『火垂るの墓』ってみましたか。この俳句は，またそれとは少し違っていていと思う。今，蛍はあまりみることはできないから少しさみしい。でもこの俳句は，蛍と少年の顔の様子が絵のようにみえてきます。

文例7

⑳私が，小学生ぐらいのときによく虫をとりにいっていたから，なんとなく気にかかっただけで，別に大した意味はない。

あとは，作者を見ていると知っているのは，名前しか知らないけど，山口誓子しかいなかったから。

感想文

㉑私も蛍をとりにはよく行った。

㉒でもどうして蛍をとった少年の指がみどりなのか分からない。ちなみに私も山口誓子しか知らない。この俳句には理解できない所がいっぱいあって困る。早くちゃんとした訳が知りたい。

文例8

この俳句を読むと川ほとりで，㉓夏の夜に無邪気に遊ぶ姿が思われる。目を閉じるとその姿が浮かんでくる。

㉔数年前までは，こんな姿が，現実にあったのに今では，あまりみられない。すごく悲しい気がする。近代化が進んでいく日本，俳句のような日本独特の風景は，なくなっていく。21世紀になっていくのだからしかたがない。でも，蛍のような風景は，自分が老人になっても見ていたい。

感想文

同じようなことを，自分も思います。㉕夏の夜に，蛍をつかまえるのに夢中になっている子供たちが，はしゃいでいるのが，思い出されます。㉖本当に現代では，蛍なんてどこに行けば見られるのだろうという感じになって，今の子供たちは，こんな俳句の中の風景を見たことがないと思う。そんな子供に，この風景をみせてあげたい気がします。

文例9

記述無し

感想文

私もこの俳句がいいと思いました。

Ａさんはどうしてこれがいいと思ったのでしょうか。

私がこの句を選んだのは，蛍に思い出を持っているからです。自然の中で虫の光というのは，大変きれいだと思います。どうして光

るのでしょう。頭の光と同じなのでしょうかね。（笑）これは冗談ですが，どうしてなのか一度知りたいものです。

６　鑑賞文と感想文の分析

生徒の鑑賞文と感想文から，この句をどう捉えているかを分析する。

語句の単位で見てみると，まず「蛍」であるが，蛍についてはなじみのある生き物であり，やはり，その光に対するイメージが強いのでそれ以外の言及はなかった。

次に「獲て」であるが，「つかまえた」というイメージが強い。傍線部①（以下数字のみ示す），⑦，⑨では，「獲て」という言葉を「つかまえる・手に入れる・取得する」といった意味で捉えているが，さらに，①「いくらとろうとしても」，⑤「どうしても，その蛍がほしくなってきて」，⑦「苦労してつかまえた」というように，「獲」の持つ「鳥や獣を狩猟で捕らえる」といったイメージがあり，偶然に捕らえたのではないといったニュアンスを含んでいる。やはり「得」ではなく，「獲」を使っているところに着目している。

「少年」については，一人称的な視点で捉えているものがほとんどだが，中には⑪「小さい男の子」や㉓「夏の夜に無邪気に遊ぶ姿」，㉕「蛍をつかまえるのに夢中になっている子供たち」のように客観的な視点で捉えているものがある。

「指」については，⑧「指の先に蛍をのせて」といった繊細な感じのものと，③「蛍をつぶしてしまって」，⑥「やっとつかまえたら手で思いっきり握りしめたために手の中でつぶれてしまい」，⑯「勢い余って蛍を指でつぶしてしまい」といった強いイメージのものがある。

次に，「みどりなり」であるが，これは，ひらがな表記であることから，イメージが分かれた。

②「蛍の光とは緑色だったんだなあ」，⑧「実際に手に取って指の先に蛍をのせて間近に見れば，黄色ではなく，緑色に見える。」⑫「蛍のみどりっぽい光が」というように蛍の光が緑色であるというイメージと，⑩「指まで緑に輝くほどの光を」，⑫「少年の指をみどりにそめている」，⑭「少年の手をみどりに染めている蛍の光」，⑮「蛍がかすかに光っているので少年の指がその光によってみどりっぽく光っていた。」といった少年の手が緑色に光っているというイメージ，それからこれは蛍を潰してしまったというイメージから，③「蛍をつぶしてしまって緑色だ」，⑥「蛍の緑の血が手や指についた。」，⑯「蛍から緑のしるが出て，指が緑になった」といった蛍の体液が緑であると捉えたもの等である。

句の内容ではなく，「蛍狩り」や「蛍のいる風景」に対する追憶を書いたものもあった。

㉔数年前までは，こんな姿が，現実にあったのに今では，あまりみられない。すごく悲しい気がする。近代化が進んでいく日本，俳句のような日本独特の風景は，なくなっていく。21世紀になっていくのだからしかたがない。でも，蛍のような風景は，自分が老人になっても見ていたい。

㉖本当に現代では，蛍なんてどこに行けば見られるのだろうという感じになって，今の子供たちは，こんな俳句の中の風景を見たことがないと思う。

以上のように，生徒は句のイメージを捉えているが，この鑑賞文と感想文を踏まえて，それぞれのイメージをもう一歩深く捉えさせ，鑑賞させたい。

７　生徒の初出イメージを踏まえた準備段階について

（１）語句の表記に着目した指導方法

①にあるように，「獲」という漢字を使っているところに着目している生徒もいることから，「え（て）」に当てはまる漢字を比較することでイメージを深めてみる。

「獲」は，動詞として，「ア　鳥や獣を狩猟で捕らえる。イ　敵を捕虜にする。ウ　手に入れる。取得する。エ　信任される。信頼を得る。オ　作物を収穫する。」という意味がある。

「えて」には「得て」という漢字も当てはまるが，こちらの方は，「ア　手に入れる。獲得する。イ　得意になる。満足する。ウ　うまくいく。思い通り実現する。エ　そなわる。具備する。オ　適合する。かなう。よろしきをえる。」といった意味になる。

「得」を使わずに「獲」を使っているのは，「意図的に獲物を手に入れる」といった意味からであり，これは蛍狩りで蛍を捕らえるといったイメージである。誓子の少年と蛍を題材にした他の句，「一点の蛍火獲たる子羨し」，「蛍獲し子に蛍かと問うて寄る」，「蛍獲て燈暗き家に向ひけり」を見てもこのことは類推される。上記の生徒のイメージのように，一生懸命追いかけてつかまえたというイメージと手の中に取り込んだというイメージが蛍狩

りといった遊びの上のことであり，遊びの中で真剣さとか，あるいは「無我夢中」「一心不乱」といった気持ちが付加された「獲て」であるところまでイメージを膨らまさせたい。

次に「みどりなり」についても，なぜひらがな表記なのかに着目したい。

「みどり」は通常「緑」という漢字で表されるが，「碧」または「翠」という漢字もある。漢和辞典では，

「緑」は，ア 緑色。イ 黒に近い濃緑色。
ウ 植物名。

「碧」は，① 青緑色の玉。あおいし。
② 青緑色。みどり。あお。あを。
③ 姓。

「翠」は，① 鳥の名。かわせみ。
② カワセミの羽。③ひすい（翡翠）青緑色の宝玉。
④ 巻き貝状に作った眉墨。
⑤ 鳥の尾の部分。⑥ 姓。

となっている。

以上の点から，「みどりなり」というひらがな表記が単なる「緑色」を表しているのではなく，「碧」や「翠」の持つ宝玉のように光るイメージを含んでいることが考察される。生徒の中にも，⑭「この歌はとても，神秘的な感じがする。少年の手をみどりにそめている蛍の光はそこだけがまた別空間のように思った。」，⑲「蛍のみどりの光は，小さいけれど，少年をつつんでいるような神秘的な感じがします。」といったイメージで捉えている者がいる。

作者自身も『自選自解山口誓子句集』（注５）では，「私は，少年の指を中心にして，蛍を獲た少年の指が「みどり」だったと詠ったのである。「みどり」は「緑」である。蛍光は緑と云えぬが，この場合，緑と云うのが一番美しい。」と述べている。

また，「蛍火の極限の火は緑なる」という作者の他の句からもそのことは裏打ちされている。

確かに，ラインマーカー等でいう「蛍光色」は緑ではなく，黄色に近い色である。それをそのまま捉えるのでなく，夏の夜，川べりといった背景と，少年たちの真剣な遊びの報償という意味を込めた中で，作者は一番美しいからという理由で緑であるとしたのである。

そのイメージを強調するために，「緑」「碧」「翠」といった単純な緑色ではなく，神秘的な光のイメージの表現としてひらがな表記にしていると類推される。

（２）他の資料等から考察する

ここでは，作者自身による解説を紹介し，そこから考察する。

上述の『自選自解山口誓子句集』によると，この句は作者が昭和22年，保保村（ほぼむら）というところで泊まった家の姉弟と一緒に蛍狩りをした時の作であり，「弟は少年であった。その少年は，蛍を捕って，それをつまんで，かごに入れようとした。そのとき，つまんでいる親指と人差指を蛍の碧い光が照らした。」と自解している。

ここから，「少年」が作者ではなく，この弟のことであることが分かる。また，同解説にある作者の「脂粉なき少女とともに蛍狩」という句を紹介し，この姉弟がまだ幼い子供たちであり，㉓「夏の夜に無邪気に遊ぶ姿が思われる。」や㉕「夏の夜に，蛍をつかまえるのに夢中になっている子供たちが，はしゃいでいるのが，思い出されます。」といったイメージと結びつく。

生徒たちの鑑賞の中に「蛍を潰してしまった」というイメージで捉えているものがいくつかあったが，「潰してしまう」残虐性を持った「少年の指」がその反面で「そっとつまむ」繊細さを有していることが，この句に更なる神秘性を与えていると類推される。

（３）句全体のイメージについて

「獲て」，「みどりなり」両方のイメージを合わせると，蛍狩りに行った少年が捕まえた蛍が手のひらの中で青白く光ったというのが句意の骨子となると思われる。

作者も上述のように「その少年は，蛍を捕って，それをつまんで，かごに入れようとした。そのとき，つまんでいる親指と人差指を蛍の碧い光が照らした。」と自解しているがそれとも一致する。

また，作者自身の解説と合わせると，「田舎に宿泊した時に，幼い少年たちと蛍狩りに行った。子供たちは夢中で蛍を追いかけ，つかまえた蛍を指でつまんでみていると，蛍の神秘的な光が少年の指を緑色に照らした。」というイメージになる。

このように，生徒の初出のイメージを把握することで，イメージを深めるための指導上のポイントが明らかになった。

この段階まで準備してから，アクティブ・ラーニングを導入した授業の工夫を考察する

必要がある。

８　アクティブ・ラーニングで深めるテーマについて

上記のようなイメージを深めるために，アクティブ・ラーニングを使って何を深めるかであるが,下記のようなテーマが考えられる。

・少年とは誰か？
・なぜ,蛍を捕まえるのが「少年」なのか？
・少年の指は蛍を「つまんでいるのか」,「潰しているのか」？
・「獲」という漢字を使っているのはなぜか？
・「みどりなり」がひらがな表記なのはなぜか？
・この句はどこで読まれた句なのか？

等，色々なテーマが考えられるが，授業者が上述のような下準備をして，深めるポイントを押さえておけば，内容から大きく外れることもなく，単なる座談会になる可能性も低くなると思われる。

こうしたテーマを使って，どのような手法でアクティブ・ラーニングを行うかについては，次回に譲るが，その際に，山口誓子の他の蛍について詠んだ句，特に蛍の光について詠んだ句をいくつか参照させたい。

例

・この暮色佳しと蛍の点し出づ
・明き燈に近づきゆけり掌に蛍
・火をともす蛍の生のいただきにて
・蛍にも吾にも帰るべき刻ぞ
・蛍捕り来て容顔を粧ひし
・すすみ来し空間かへす一蛍火
・川べりの木は蛍火の館なる
・星の散蛍火の散天と地に
・星よりも明蛍火の生ける火は
・蛍火が星の代わりに天降り来る
・蛍火と天なる星と掌をこぼれ

また,『自選自解山口誓子句集』には「弟」だけではなく「姉」に関する記述もある。「姉は，少女であった。その姉を，「脂粉なき少女とともに蛍狩」と詠った。白粉けのない，素顔の少女と一緒に，暗い野川の蛍を捕ったのだ」とある。

これは少し高度であるが，少年少女と夏の夜に包まれた暗い川で幻想的な蛍の光を追いかけることの叙情性についても話し合いをさせることも面白いかもしれない。

９　終わりに

アクティブ・ラーニングは生徒たちの理解のレベルを深めることに意味がある。同じレベルで話し合いをしても教育的効果はない。

また，俳句のように解釈やイメージが様々に分かれるような教材ではいきなりアクティブ・ラーニングを導入しても話し合いにならない。

そこで，俳句の初読の段階で鑑賞文とその感想文を書かせたものを使うことで，生徒たちの理解とそのレベルを把握することで，アクティブ・ラーニング導入のポイントをつかむことができると考えた。

実際に授業を実施していないので研究ノートとしたが，機会があれば実践してその結果や課題について考察してみたい。

〈注　釈〉

注１　『国語教育研究大辞典』p661

注２　『中学校国語科の指導事例集』1991.3　明治図書　p20

注３　山口誓子（1901年（明治34年）－1994年（平成6年））は京都府出身の俳人で，高浜虚子に師事し，昭和初期に水原秋桜子，高野素十，阿波野青畝とともに「ホトトギスの四S」とされた。しかしながら水原秋桜子に従い「ホトトギス」を離脱し，従来の俳句にはなかった都会的な素材，知的・即物的な句風，映画理論に基づく連作俳句の試みなどにより，秋桜子とともに新興俳句運動の指導的存在となった。戦後も「天狼」を主宰し現代俳句のリーダーとして俳壇を牽引した。

注４　選んだのは9人だが，鑑賞文は1人無記入であった。

注５　白凰社，1969.2　（現代の俳句，5）